2010年　標準古典　レポート１

＊　古典の授業は、すべてプレゼンテーション形式で行うため、授業教室は４月当初は社会科教室ですが、６月６日のスクーリングから、原則、視聴覚教室で行います。

御伽草子　浦島太郎

女房（女）が住んでいる場所はどこ？

→「言葉では表現できないほど」豪華な所。ある貴金属が本文中に二カ所でてきます。
それを本文中のことばで４字以内で抜き出してください。

＊その貴金属の一つは、足利義満が建てた京都の有名なお寺（別名「鹿苑寺」。1950 年に火事で焼失。この事件を題材に三島由紀夫が『金閣寺』という小説を書いています。）にも使用されています。もう一つの貴金属も、京都の東山にある足利義政がたてた有名なお寺（別名「慈照寺」）に名前だけ使用されています。

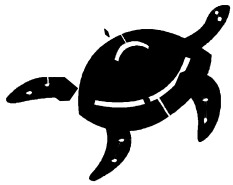
女の住み所を漢字３字で答えると？→　本文では「〇〇城」と表現されています。漢字３字で抜き出してください。

何故、浦島太郎は３年もそこにいたのか？

→「おもしろきことどもに心を慰み、栄華に誇り、明かし暮らし・・」が本文中で端的に表現されていることです。この部分の訳を学習書で確認し、まとめましょう。

↓

女房（＝女）は何を隠していたのか？



「包む」とは「隠す」の意味です。女は何を太郎に隠していたのでしょうか。
「自分は〇〇であることを隠していた」という形で答えるといいでしょう。

何故、浦島太郎は故郷に帰る気になったのか？

「ふるさとの父母を、見すてかりそめに出（で）て、三年を送り候へば、父母の御事を心もとなく候へば、あひ奉りて、心やすく参り候はん。」という部分に端的に表現されています。この部分の訳を学習書で確認して、まとめましょう。

そのいはれとは？

「そのいはれ」は具体的には、「浦島太郎の身におこったこと。」です。
①亀を助けた。
②その翌日遭難した女性を助けて、その故郷に送り届けた。

③そこは竜宮城でその女性と夫婦になった。
④３年たって、父母の事が心配になり、帰郷したら、故郷が荒れ果てていた。
⑤その女性は実は助けた亀だった。　　これらをまとめてください。

「虎臥す野辺」とはどのような景色でしょう。

国語の場合、同じ内容を表現するときに、一部には同じ語句を使い、少しだけ表現をかえて、その内容をくり返す場合が多いです。
この場合は、**「〇〇く〇しげき野辺**」の形で表現されています。

＊大学受験等を目指す方に

上記の表現方法は現代文にもあてはまります。人は「イイタイコト」を何度もくり返す傾向があります。文章をよく読み、特徴的な同じことばがくり返されていた場合、そのことばがキーワードになる場合があります。また、同じ内容の文章がくり返されていた場合、その文章が「筆者」が主張したいことであることも多いようです。ご参考に。

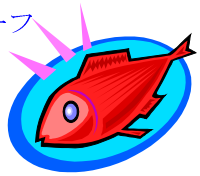
閑話休題

「伊雑宮」に伝わる伝説

三重県志摩市磯部町上之郷にある伊雑宮は日本三大御田植祭の一つである御田植式で有名な神社です。この伊雑宮の周囲には、浦島太郎や海女が龍宮へ行ったという伝説がいくつか残っています。伊雑宮の宝物の一つには玉手箱がありますが、海女が竜宮城から持ち帰ったものとされています。

定期観光船「龍宮城」

三重県鳥羽市の鳥羽湾めぐりの定期観光船「龍宮城」は「浦島太郎」の世界をモチーフとした船です。一度見れば忘れられないインパクトです。ご参考に。



以下 HP より引用。

船体は夢の世界“龍宮城”をイメージした外観。

メインカラーは朱・緑・金の３色。船首部は「門」をかたどったデザインで、船体各所には龍宮伝説に登場する「浦島太郎」「乙姫様」「亀」「鯛」「ヒラメ」「エビ」や海底をイメージした昆布などの立体装飾を施しています。　　船内は、乗船客を物語の主人公の気分にさせる異次元体験的な空間となっています。エントランスホールでは、龍宮城の入口を意識して、　ブルーを基調とした海底世界を演出。天女が舞う天井画のある部屋、　「浦島太郎」のお話を絵と解説で紙芝居風に展開している部屋、中国風シャンデリアに彩られたあでやかな色調の奥の間など、船内を回 遊することによって、おとぎ話の世界をそのまま実感できる設計となっています。

http://www.shima-marineleisure.com/ryugujyo.html

竹取物語　作者未詳

紫式部は『源氏物語』（絵合せの帖）の中で、『竹取物語』のことを**「物語の出で来はじめの祖（おや）」**と述べています。しかしながら、作者 や成立年代は不明です。

かぐや姫の昇天

意訳（注意　意訳ですので正確な訳ではありません。）

　こうして いるうちに、宵が過ぎて、午前零時ほどに、家のあたりが昼の明るさ以上に光った！

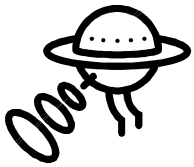
　満月の明るさを十も合わせたほどの明るさで、そこにいる人の毛の穴まで も見えるほどじゃった。

　すると、大空から人が雲に乗って降りてきて、地面から人の背丈ほどの高さにふわふわ浮いて、立ち並んだのじゃ。

具体的にはどれぐらいの明るさ？

宵うち過ぎて、子の時ばかりに、家のあたり昼の明かさにも過ぎて光りたり。望月の明さを十合はせたるばかりにて、ある人の毛の穴さへ見ゆるほどなり。

→この部分を学習書をみて、書きましょう。



意訳（注意　意訳ですので正確な訳ではありません。）

　これを見て、家の中 にいる人も外にいる人も、心が魔物に襲われたようになり、戦おうという心もなくなってしまったのじゃ。かろうじて気力を奮い起こして、弓矢を取ろうとする が、手に力もなくなって、ぐったりしてしまうのじゃ。中に気丈夫な者が、ぐっとこらえて射ようとするのじゃが、弓はとんでもない方に飛んで行ってしまい、 戦うこともできず、意識はぼおーっとしてしまい、ただわけもわからずお互い見つめ合っている。

意訳（注意　意訳ですので正確な訳ではありません。）

かぐや姫 を閉じ込めておいた部屋の戸が、すぐに、さぁーさぁーと開いた。格子も、人は何もしていないのにみな開いた。お婆さんが抱きしめていたかぐや姫は、何かに連れ去られるように外に出ていく。お婆さんは止めようとするが体が何かにのしかかられたように動かず、姫を仰ぎ見て泣くことしかできなかったのじゃ。

かぐや姫の想い

御衣(みぞ)をとり出でて着せむとす。その時、かぐや姫、　「しばし待て」と言ふ。「**衣着せつる人は、心異(こと)になるなりといふ。**もの一言、言ひおくべきことあり」　と言ひて、

文(ふみ)書く。天人、「遅し」と、心もとながり給ふ。かぐや姫、「もの知らぬことなのたまひそ」とて、いみじう静かに、おほやけに御文たてまつり給ふ。

衣とは何か？＝天の羽衣

天の羽衣を着たらどうなるの？

「**衣着せつる人は、心異(こと)になるなりといふ。**」(天の羽衣を着せられた人は、心が変わってしまうのだといいます)

→本文に沿って説明すれば、

「翁のことを、気の毒で、いとしいと思っておられた気持ちも消えてしまう。」

ということですが、まとめると、「今までの記憶や感情がなくなってしまう」ことになります。もちろん、かぐや姫が帝を「あはれ」と思った気持ちもなくなってしまいます。

心もとがりとは？→じれったい気持ち

→天人は早く、きたない地上から天に帰りたくてうずうずしている。

天人の「地上」へのとらえ方は、地上を「きたなき所」と表現しているところからわかります。

原文　「壺なる御薬奉れ。きたなき所のもの聞こしめしたれば、御心地あしからむものぞ」

＊大学受験等を目指す方に

古典文学では和歌が詠まれる場面がクライマックスです。和歌に万感の想いが込められています。

かぐや姫の帝への気持ち

今はとて　天の羽衣着るをりぞ　君を**あはれ**と思ひいでける

【意訳】今が最後と天の羽衣を着て、記憶がなくなる瞬間、あなたを愛していると気づきました。

日本古典文学のキーワード　「あはれ」

あはれ【怜･哀】喜怒哀楽によって生ずる深い感動を表す語。愛情･同感･感慨･賞嘆･悲哀などの感情を詠嘆的に表す語。平安時代には、情趣の世界を表す最も重要な美の表象として、しみじみとした感動を催す意に用いる。参考　角川古語大辞典

＊「あはれの文学」の最高傑作が「源氏物語」といわれています。平安時代の古典の場合、「(異性を)「あはれ」と思ふ」という表現が出てきた場合、その異性に対する恋情を表現している場合が多いようです。この場面のかぐや姫への帝への「あはれ」と

いう気持ちは、帝への慕情です。記憶を失う前に、自分の帝への愛情にかぐや姫が気付いてしまうという大変せつない場面です。

「かぐや姫、「もの知らぬことなのたまひそ」とて、いみじう静かに、おほやけに御文たてまつり給ふ。」と原文では表現されていますが、「いみじう静かに」（たいへん静かに）帝にお手紙をさしあげたかぐや姫の動作、および「君を**あはれ**と思ひいでける」という和歌から、帝への手紙にかぐや姫が万感の想いをこめたことを読み取ることができます。

原文

ふと天の羽衣うち着せたてまつりつれば、翁を「いとほし、かなし」と思しつることも失せぬ。この衣着つる人は、もの思ひなくなりにければ、車に乗りて、百人ばかり天人具して、昇りぬ。

意訳（注意　意訳ですので正確な訳ではありません。）

天人がかぐや姫にさっと天の羽衣をお着せ申し上げたところ、お爺さんのことを「気の毒だ。愛おしい」とお思いになっていたかぐや姫の気持ちはすべて消えてしまった。この着物を着てしまった人は、感情がなくなってしまうのじゃ。そして、かぐや姫は、飛ぶ車に乗って、百人ばかりの天人を連れて、天に昇っていった。

閑話休題

市村昆監督　沢口靖子主演の『竹取物語』(1987)では、「飛ぶ車」を「巨大な宇宙船」として描いています。びっくりしますが、市川監督の解釈は、無理ではありません。

かぐや姫の超能力？

原作では、かぐや姫は、瞬間的に相手の前から、自分の姿を消す特殊能力（テレポーション？）をもった女性として描かれています。

原文　帝、「などかさあらむ。なほゐておはしまさむ。」とて、御輿を寄せ給ふに、このかぐや姫、きと影になりぬ。はかなく、くちをしとおぼして、げに、ただ人にはあらざりけりとおぼして、「さらば、御ともにはゐて行かじ。もとの御かたちとなり給ひね。それを見てだに帰りなむ。」と仰せらるれば、かぐや姫、もとのかたちになりぬ。

意訳（注意　意訳ですので正確な訳ではありません。）

帝は、「どうしてそんなことがあろうか。やはりお連れしましょう。」と言って、御輿をお寄せになると、このかぐや姫は、急に見えなくなってしまった。あっけなく、残念だとお思いになって、なるほど、普通の人ではいのだなあ、と帝はお思いになって、「それほどい

やなのなら、お供としては連れて行かない。もとのお姿におなりください。せめてそのお姿だけでも見て帰りたいのです。」と仰せになると、かぐや姫は、もとの姿になった。

＊教科書に載っている原文には天人が触れていないのに、戸が開くという描写もありますが、これは念力（サイコキネシス）と考えることも可能です。

原文　その返り事はなくて、屋の上に飛ぶ車を寄せて、　「いざ、かぐや姫、穢き所に、いかでか久しくおはせむ。」と言ふ。立て籠めたる所の戸、すなはちただ開きに開きぬ。格子どもも、人はなくして開きぬ。

＊このように、原文をつぶさに読んでみると、「竹取物語」は最古の SF だったという解釈もできますね。SF あり、ラブストーリーあり、仏教思想あり、政治への批判有り、と「竹取物語」は幾通りもの読み方ができる作品です。これを機会に「竹取物語」を読み返してみませんか？

伊勢物語　歌物語

在原業平が主人公。紀貫之は古今和歌集の仮名序において、平安時代初期の和歌の名手として、僧正遍昭、在原業平、文屋康秀、喜撰法師、小野小町、大伴黒主の六人をあげています。（六歌仙）

かすが野のわかむらさきのすり衣しのぶのみだれかぎりしられず（新古 994）
【通釈】春日野の若紫で色を摺り付けた摺衣の「しのぶもぢずり」模様ではないが、春日の里で垣間見た、たおやかな女を恋い忍ぶ心の乱れは、限りを知らない。

和歌の修辞法

掛詞とは、同音を利用して文脈上二つ以上の意味を持たせるものです。その場合ほとんどが別漢字で違う意味を持たせるため、どちらとも取れるよう平仮名で書きます。

例　ギャグも限りなくそれに近いものです。少し前の某醸造酢会社のＣＭで「すっぱくないす」というのも「お酢」と「ナイス」を掛けたものです。

縁語とは？

関係のあることばを連想して和歌に詠みもの。「しのぶもじずり」＝「しのぶずり」＝乱れた模様・染めた布・染め方・・・・・ということなので、**歌の中でこれに縁がある、関係のある語、つまり縁語は「乱れ」と「そめ」。以上のわけで、「しのぶずり」の縁語は「乱れ」と「そめ」になります。**

閑話休題

先日、なぜ、この歌物語に「伊勢物語」という名前がついたのか？という質問がありました。諸説があるようですが、以下にご紹介します。

書名の由来［編集］

古来諸説あるが、現在は、第 69 段の伊勢国を舞台としたエピソード（在原業平と想定される男が、伊勢斎宮と密通してしまう話）に由来するという説が最も有力視されている。その場合、この章段がこの作品の白眉であるからとする理解と、本来はこの章段が冒頭にあったからとする理解とがある。前者は、二条后や東下りなど他の有名章段ではなくこの章段が選ばれた必然性がいまひとつ説明できないし、後者は、そのような形態の本はむしろ書名に合わせるために後世の人間によって再編されたものではないかとの批判もあることから、最終的な決着はついていない。

また、業平による伊勢斎宮との密通が、当時の貴族社会へ非常に重大な衝撃を与え（当時、伊勢斎宮と性関係を結ぶこと自体が完全な禁忌であった）、この事件の暗示として「伊勢物語」の名称が採られたとする説も提出されているが、虚構の物語を史実に還元するものであるとして強く批判されている。さらに、作者が女流歌人の伊勢にちなんだとする説、「妹背（いもせ）物語」の意味だとする説もある。

また、源氏物語（総角の巻）には、『在五が物語』（在五は、在原氏の第五子である業平を指す）という書名が見られ、『伊勢物語』の（ややくだけた）別称だったと考えられている。　　**フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』より「伊勢物語」**

斎宮について「http://www.pref.mie.jp/saiku/hp/nani/nani.htm」より引用抜粋

斎宮（さいくう）と斎王（さいおう）

斎宮は「いつきのみや」とも呼ばれ、斎王の宮殿と斎宮寮（さいくうりょう）という役所のあったところです。斎王は、天皇に代わって伊勢神宮に仕えるため、天皇の代替りごとに皇族女性の中から選ばれて、都から伊勢に派遣されました。

古くは、伊勢神宮起源伝承で知られる倭姫命（やまとひめのみこと）など伝承的な斎王もいますが、その実態はよくわかっていません。

制度上最初の斎王は、天武天皇（670 年頃）の娘・大来皇女（おおくのこうじょ）で、制度が廃絶する後醍醐天皇の時代（1330 年頃）まで約 660 年間続き、その間記録には 60 人余りの斎王の名が残されています。

発掘でよみがえった斎宮

昭和 45 年（1970）、現在博物館の建つ古里地区（ふるさとちく）で発掘調査が行われ、長い間埋もれていた斎宮が再びその姿を現しました。昭和 54 年には、東西約 2 キロ、南北約 700 メートル、面積約 137 ヘクタールが国の史跡（しせき）に指定され、現在も計画的

な発掘調査が続けられています。

これまでの調査の結果、斎宮では、奈良時代後期になると史跡東部で、区画道路により碁盤目状に区切られた方格地割（ほうかくちわり）が造営され、建物が整然と建ち並んでいたことが判明しています。この地割は、約 120 メートル四方の区画が東西 7 列・南北 4 列並んで構成されるという大規模なものでした。

斎王と王朝文学

神に仕える未婚の皇女という特殊な立場にあった斎王は、王朝文学に登場したり、そのモデルとされることがしばしばでした。斎宮が「たけのみやこ」と呼ばれたこと、平安時代後期の良子内親王、規子内親王などの時には都の歌人が参加する歌合わせが斎宮で催されるなど、文芸が盛んであったことが古典文学からわかります。

『伊勢物語』の恬子内親王のほか、『大和物語』には、柔子内親王に藤原兼輔が贈った歌や、藤原敦忠との恋で知られる雅子内親王がみえています。『栄華物語』には当子内親王が左京太夫道雅との関係を裂かれた話が載っています。『増鏡』『とはずがたり』に登場する愷子内親王など、いずれも斎王ゆえに生まれた悲恋物語です。

光源氏を慕う六条御息所は、琴の名手で歌才に秀で歌集『斎宮女御集』を遺した実在の斎王徽子女王がモデルになったといわれています。紫式部は歴史上の事実を巧みに物語に折り込みながらも、また単なる事実の羅列とは一味違った斎宮関係の物語として結晶させました。

伊勢物語の斎王

「昔男ありけり」であまりにも有名な『伊勢物語』は、在原業平と思われる「男」を主人公としています。

その中でも第六十九段狩の使（かりのつかい）は、斎宮を舞台に、斎王恬子内親王と「男」のはかない恋を描いています。それが事実か否かは、不詳ですが、恬子がこの後も斎王の任をまっとうしたことは事実です。